



十 何年ぶりだかの大雪に見舞われた。入つてい  
た予定は、どれもキャンセルになった。朝、窓  
の外から誰かがタイヤを空転させている音が聞こえて  
きた。しばらくエンジンを吹かす大きな音が繰り返さ  
れていたが、タイヤは空しく滑るばかりで、そのうち  
ドアがボタンと閉まる音がして、雪にスコップが刺さ  
る音が続けて聞こえてきた。

ぼくは早々に引きこもりを決め込んでいて、立ち往  
生している車の成り行きを聞いているだけだ。こんな  
大雪の朝に、通学も通勤も考えないでいられるという  
ことをどう思うべきだろうかなんて考える。退職した  
らばこそその幸福である、とか、用事がある人たちに申  
し訳ない、とか、そんなことどうだっていい、とか。

再びエンジン音とタイヤの空転する音が聞こえてき  
たので、そろそろ手伝いに出ようかと思つたら、男た  
ちの話し声が聞こえてきた。ぼくより逡巡する時間の  
短い人たちがさつさと出て、雪をかいいたり車を押した  
りし始めた。掛け声が重なって、どこか楽しそうだ。  
どうにかかなりそうな感じなのがわかった。ぼくの出る  
幕はなくなつたようだ。

奥出雲では、こんな日は真夜中に除雪車の鈍く唸る  
エンジン音で目が覚めた。ピーッ、ピーッと甲高く響  
くバック音の混じり具合で降雪量を推し量ることがで

きた。せわしく鳴つているときは覚悟をして、夜明  
けまでまだ何時間もあるのに起き出して雪かきを始め  
る。車を覆つた雪をどかすのにも通勤にもそれだけ時  
間がかかるからだ。ご近所さんたちも事情は同じなの  
でたいてい同じような時間にせつせとスコップを振つ  
てかき出すのだつた。かき終わつてもそれで安心とは  
いかず、息を詰めるようにして路面を睨んで学校に行  
き、学校は学校で大雪だから、子どもたちが来るまで  
雪かきをする。授業が始まるまでには十分くたびれて  
いた。でも、それらはどれもしなければならぬ用事  
なのであつて、しなかつたら子どもたちやぼくや家族  
の日常は壊れてしまうのだから、くたびれはしても辛  
いことではなかつた。

窓の外の車は無事に動き出し、車中から若い男の礼  
を言う声が聞こえてきた。彼は会社間に合つて無事  
に仕事を始められるだろう。ふと大田南畝の狂歌が浮  
かんた。昔ドラマにもなつたので覚えていたのだが、  
どこかずれていたピントが今になってようやく合った  
ように感じた。

世の中は、われより先に用のある 人のあしあと橋の  
上の霜

雪は松江にしては珍しく一週間近くも続いた。その  
間、用のある人のタイヤは何度も空転した。

### 専門ババ奮闘記 (その2)133

## 木幡智恵美

### コロナ感染 (1)

長男が御殿場に帰つた翌朝からのどが痛んだ。その前から夫ものの痛みを訴えて  
いる。二男のがうつつたのだろうか。その日は何とか畑仕事もこなしたが、夜中にはの  
どの痛みで何度も目を覚まし、熱も出だした。翌日は玉湯に子守の手伝いに行くつも  
りで安静にしていたものの、三十八度を超えるときさすがに子守をする自信がなく、変  
なウイルスだつたら孫たちにもうつしてもいけないので、娘に連絡を入れる。すると、娘  
も同じく熱を出したとのこと。私に替わり、夫に玉湯に行つてもらふことにした。

翌日、熱は三十七度台下がり、前日ほど難儀ではなかつたが、またひどくなるとい  
けないので、点訳をしては休憩し、洗濯物を畳んで休ませて過ごす。連休後半は寝連  
休かため息をついていると、「忠ちゃんの仕事が早く終わつたみたい」と言つて、夕  
方五時前に夫が帰つて来た。その夜は、息子から遅くなると連絡が入つたので、夫と  
二人で夕食を摂る。

大型連休が終わわり、息子は出勤、娘や孫たちもそれぞれ仕事や学校、保育園だ。植え  
たばかりの苗が気になるけど、今一つ調子があつたりしないので、畑の水やりは夫に  
頼んだ。少しずつ身体慣らしもしなければと、午後は郵便局まで歩き、帰りに食料を  
買い込む。そして、夕食準備をしていると、夫が二階から降りてきて、「栄養子から  
電話があつてな。コロナに感染したから、代わりに保育園の迎えに行つてだつて」と  
のこと。しばらくして息子が帰つてきて、その話をすると、「参つたなあ」と頭を抱え  
る。無理もない。連休前、RSだか何だか分からないウイルスに感染して高熱を出し、  
数日休んでそのまま連休に入っている。夫が濃厚接触者となるので職場に連絡を入れ  
なければならぬ。二階に上がつて電話をした息子が台所に顔を出し、「明日から自  
宅待機だわ」と言つて、また二階へ戻つていった。

その夜は、夫と息子はそれぞれ自分の部屋で、私は台所で、別々に夕食を摂る。娘  
から電話が入り、「家はもちろん全員検査受けるけど、お父さんも濃厚接触者になるか  
ら明日検査を受けるよう保健所から連絡があつた」とのこと。昨夜は夫と一緒に食事  
をしている。もし夫が陽性だつたら…。連休明け早々、えらいことになった。

30代フリーター トヨタ自動車の社長が14年ぶりに交代することになった。「トヨタ変革へ若返り」などと報じられている（1月27日朝日新聞朝刊）。年金生活者 社長交代は、岸田文雄が使っているのとは違う意味での「新しい資本主義」に乗り遅れた結果と言える。

資本主義というシステムを意思を持ったひとつの主体と考えるなら、ここでいう「新しい資本主義」の「新しさ」とは、利潤を生み出すための必須条件である富の稀少性を人為的に作り出すことを指す。その有力な手段のひとつが「脱炭素」であり、そのため現在の資本主義はEV（電気自動車）を自動車の世界標準としつつある。それなのに、トヨタはガソリンも使うHV（ハイブリッド車）などもつくる「全方位戦略」をとってきた。それが遅れのものになった。

30代 稀少性をつくり出すなんて、わざわざ貧乏になるようなもんじゃないか。

こうとする心理が働く。だが、今の日本では家計の消費支出の過半は選択的消費で占められている。値上がりするぞ、と脅されても、安い利子で金を貸すから、と誘われても、必要でないものや好みでないものまで買う気にはならない。

30代 それでも日銀は物価上昇、デフレ脱却に執着した。政府も経済界もそれをそろそろ手を挙げて支持した。

年金 デフレの進行が資本主義そのものの危機につながる恐れがあったからだ。日銀も政府も経済界もそれを意識していたわけではなく、資本主義というシステムに動かされていたと考えることができる。

デフレとはモノやサービスが潤沢に供給される状態を指す。だから物価が上がない。長谷川慶太郎はそれを「買い手に極楽、売り手に地獄」と言い表した。買い手が労働者の場合は、給料が上がないのは不満だろうが、賃金は下方硬直性が働くので、デフレ下でも他の諸物価ほど下がったり、伸

年金 これまで資本主義はグローバル化によって企業にイノベーションを競わせ、それによって利潤を生み続けてきた。それが富の稀少性の縮減を加速した。ところが、稀少性の縮減がさらに進んでマイナスとなるようなことが起きれば、富をめぐる競争は不要になる。競争が止まれば利潤を生む機会は失われ、資本主義の生命が尽きかねない。

だから、稀少性を無理してでも作り出す必要がある。そのために、「脱炭素」の名のもとに、まだ使える化石燃料を捨てようとしている。

トヨタは「脱炭素」はHVで技術的に可能と考えていたに違いない。しかし、問題は「脱炭素」が技術的に可能かどうかではなかった。資本主義が自らの延命のために何をしようとしているかこそが肝心なことなのに、トヨタはそれに気づかなかつたか、無視した。

30代 トヨタの社長交代が実体経済の変化を映し出しているとすれば、4月

び悩んだりすることはない。

その状態が続けば、富の稀少性の縮減は加速される。さっきも言ったとおり、もし稀少性がゼロあるいはマイナスになれば、競争は不要になる。それは利潤の獲得の機会が消滅することを意味し、資本主義にとって致命的となる。だからこそ、ほんとうは国民にとって「極楽」のはずのデフレからの脱却が叫ばれた。

30代 ところが、デフレからインフレ

に予定されている日銀総裁の交代はマネー経済の変化を象徴するものとなりそう。10年にわたって続けられてきたアベノミクスの3本の矢のひとつ「異次元の金融緩和」の誤りを前日銀総裁の白川方明が朝日新聞のインタビューで批判していた（1月31日朝刊）。低成長の原因は物価の下落、すなわちデフレにあるという考えも、物価を上げるために、日銀券をどんどん刷って金利を下げるという主張も間違っていた、と。

年金 日銀は2%の物価目標を掲げれば、消費者はモノやサービスが値上がりしないうちに買いに走るから、需要が膨らんで現実に物価が上がると考えた。そしてそれをあと押しするため、マイナス金利政策を導入した。そうすれば、企業や家計が借金しやすくなり、消費が盛り上がりつつ物価が上がると考えた。

しかし、物価はいつまでたつても上がらなかった。どうしても必要なものなら、値上がりしないうちに買ってお

への転換の引き金を引いたのは、日銀でも政府でも市場でもなく、だれも想定していなかった新型コロナウイルスのパンデミックだった。その渦中で始まったロシアのウクライナ侵略がその転換を加速した。

年金 それによって企業も家計も国家財政も打撃を受けたが、資本主義というシステムはそれを歓迎したはずだ。インフレとは富の稀少性の縮減が止まることを意味する。稀少性が競争を駆動し、競争が利潤を生み出す資本主義にとって、それは好ましい事態と言える。

アダム・スミスは「見えざる手」ということを言った。市場で各自が自分の利益を追求すれば、おのずと社会全体に適切な資源配分がなされるという考えだ。この場合の「見えざる手」を資本主義のシステムと考えれば、企業や家計や国家財政はその手のひらの上で動き回る存在に当たる。その動きだけを見ていては資本主義がどこへ向かうかはわからない。

ニュース日記 865  
中村 礼治

## 資本主義の現在地